

信州大学知の森基金を活用したグローバル人材育成のための短期学生海外派遣プログラム
実施状況および成果

プログラム名	カンボジア教育実践インターンシップ	
学部・研究科名	教育学部	
プログラム実施期間	2017年12月9日～12月17日	
研修先(国・都市・施設名)	カンボジア・プノンペン市・国立教育大学NIE	
参加者数	8名	知の森からの支援者：8名
プログラム概要	本プログラムで行った内容は、訪問国の文化や習慣の理解および現地校での教育実践の2つに分けることができる。訪問した国はカンボジア国で、1970年以降の内戦で多くの人が虐殺にあった歴史、仏教を中心とする信仰心の厚い国として知られる。訪問した場所は王宮、国立トゥール・スレン虐殺犯罪博物館、キリングフィールド、プノンペン日本人学校、王立プノンペン大学、国立教育大学NIEである。教育実践はNIEおよび附属小学校で、参加者が50分程度の英語による授業を実施した。	

実施状況・成果

インターンシップの目的の一つが、海外の学校で授業を英語を用いて実際に行うということであったので、参加者は教育学部生のみである。2年生が5名、3年生が1名、4年生が1名、教職大学院1年生が1名という構成である。

事前学習で学習指導案を作成したが、現地の生徒に触れることで、さらに良い授業をという気持ちが高まった。夕食後の班長会議、その後の班会議などで、実施した授業の反省会、翌日の授業の検討会、健康観察等があった。その後、参加者個別に各自のホテルの部屋で学習指導案の修正および教材準備が行われた。すでに授業が終わっている学生は教材準備のサポートに回った。

実際に行われた授業内容は、折り紙(小学校3年)、太陽の光を集める(小学校4年)、小数の意味(小学校6年)、日本の文字を筆で書こう(小学校4年)、そして日本の文化と武道の紹介(NIE学生)であった。いずれの学生も堂々と英語で授業を行い、授業終了後、児童らと交流を深めた。日本の文化と武道の紹介のチームはNIEの授業が120分であったため、60分で授業を行い、残りの60分は日本から来た学生が各班の中に入って、学生との交流をおこなった。

最終日に行われたNIE学長、教職員に対する帰国報告会では、班長が立派にスピーチができた。本インターンシップは現地で岡山大学教育学部の学生31名と合流して実施したプログラムである。本学から参加した学生の数では少ないので、本インターンシップの評価を岡山大学・信州大学の学生を合計して39名の学生対象に行った。その結果、以下のことが分かった。

- 1) 海外渡航経験については、半数の学生が初めてであり、次いで3回目の海外渡航の順であった。
- 2) 今回の活動で最も印象に残ったものは、自ら行った授業実践(74%)であり、次いで国立トゥール・スレン虐殺犯罪博物館(10%)であった。
- 3) 本インターンシップの経験は学生生活に役立つと感じたかという問いに対し、大変そう思うとした学生は87%、そう思うとした学生は13%であった。
- 4) 本インターンシップを経験し、視野が広がったと感じたかという問いに関しては、97%の学生がそう思うとしている。

学生の声①-教育学研究科 学生

私は本インターンシップを通して改めて日本や日本の教育を考える機会を得た。初めてNIEで子どもたちの様子を見せて頂いて印象的だったことは、子どもたちの真剣なまなざしである。授業のやり方はもしかしたら日本の方がよいかもしれない。しかし、見た子どもたちからは「学びたい」という意思がひしひしと感じられた。その背景には中学の就学率が約50%であるなどカンボジアの抱える問題も関わっていた。また、出会った大人の温かな人柄も印象的である。しかし、その背景には国内大虐殺という暗い歴史が少なからずあることを知った。まだまだカンボジアという国を知ったということではできないが、現地の学校に入り込み、現地の人と関わりながら生活することで、自国日本の教育、文化を当たり前のことではないと捉えることができたように思う。

学生の声②-教育学部 学生

- 日本の外から日本を見ることができるようになった
- 日本の教育が当たり前でないと知り、そう見える目が身についた
- 視察に行った先の感想を他大学のメンバーと比べることで自分と違う視点があると気付いた
- 外国、他大学、他学年、他学科の人と仲良くなった
- コミュニケーションの大切さ、通じることの喜びを学んだ
- 異なる文化・教育・人々に触れ価値観が変化した
- 現地の人からいろんな話が聞けた、日本以外の教育の場面を知ることができた

プノンペンのシンボルとなっている仏教寺院
ワットプノンにおける集合写真



現地小学校における授業実践

